



TITLE:

# 創造的世界経済学序説 - その課題 と論理について -

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. 創造的世界経済学序説 - その課題と論理について -. 経済論  
叢 1957, 80(4): 288-305

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132578>

RIGHT:

# 經濟論叢

第八十卷 第四號

---

神戸正雄博士  
八十歳祝賀  
記念論文集

---

昭和三十二年十月

京都大學經濟學會

## 創造的世界經濟學序説

——その課題と論理について——

石 川 興 二

### 一

一つの經濟學体系が生れるためには、その時代の歴史的課題が適切に把握され、それに適當する論理によって、この課題が解決されなければならない。このことは、スミスについてもマルクスについても見られる。今日の經濟學体系が確立されるためには、今日の世界史的課題が適切に把握され、これに適當する論理によって、この課題が解決されなければならないのである。

然し今日多くの人は、その根本に於て、過去の歴史的課題を解決したところの論理を以て今日の問題を解決せんとしているのである。今日の世界は事実スミスの論理、マルクスの論理等によつて形成された世界である。故にこの今日の世界の行き詰りを解決するところのものは、これらの過去の論理ではなく、これらの論理を止揚したところのより、具體的な論理でなければならないのである。過去の經濟學体系の研究は必要であるが、然しそれは結局今日の經濟學体系を確立するためである。今日の經濟學者たるものの究極的な任務は、先づ今日の世界史の事實に

即して今日の世界的課題を適切に把握し、これに適切な論理を以てこの課題を解決することによって、今日の経済学体系を確立することである。経済学史上の偉人は、かかる意味に於て理より事に至るところの祖述者ではなく、事より理に至るところの創造者であった。それ故に真に今日の経済学者となると云うことは、容易なことではない。私はこの道を一步でも進みたいと考えて努力して来た。砂上に樓閣を築かんよりは、むしろ今日の経済学体系確立のために一片でも礎石を置きたいと念願した。今日の世界的課題を解決するところの今日の経済学体系を確立すると云うことは、今日の経済学者達が協力して遂行すべき大事業であつて、各人はその分に応じて、その一面に貢献し得るのみである。私はかかる意味に於て、私の分に應じた事を為すべく努力して来たにすぎない。これからこの道を最後まで駑馬に鞭打つて進み行かんとするものであるが、ここに神戸正雄先生の八十歳の寿を御祝いするに當つて、この今日の経済学の課題と論理とについての考を述べて広く御批判を得たいと思うのである。

かかる問題は、これを嚴格に述べんには、實在の本質的構造より存在論を基礎として論じなければならぬのであるが、ここには先ず序説的にわかり易いためにその生成の過程に即して述べることにする。然る後に存在論的に論ずることが適當であろうと思うからである。かくして先ずこの経済学の根柢にある「生の基礎」とも云うべきものの叙述からはじめることとする。

## 二

私が大正三年京都帝国大学法科大学政治経済科の学生となつた時は、先生も三十七歳の壮年教授で、私も二十二歳の青年であつた。それから既に四十年以上の月日が経つたが、その間専攻科目が同じくないにも拘らず、先生よ

り公私共に一方ならぬ御厚意を辱うしたことに對して、先ず心より御礼を申し上げる次第である。法科大学で私共が教を受けた経済学科の先生方は、大正八年経済学部が独立すると共にこの学部の教官となられたが、その中今日健在して居られるのは、先生御一人である。先生におかれてもさぞ感慨深いことであろう。この四十餘年を省りみて私も感慨なきを得ない。

私が大学に入學した大正三年には、第一次大戦が勃發した。大学を卒業した大正六年にはロシア革命が起つた。私は明治二十五年生れであるから、三、四歳の時に日清戦争があつた。その後十年の十三、四歳の小学生として日露戦争を僅かながら體驗した。更に十年後の二十三歳の時に第一次世界大戦が勃發し、二十六歳の時ロシア革命が起つたのである。かくして世界は急に様相を変へはじめると共に日本の様相もかわつて行つた。即ち私の大学時代よりの日本は、これまでの日本と異つて、世界的日本になつて行つた。更に十五年後の昭和六年には、滿洲事變が起つた。それから九年後の昭和十五年には、國民が挙つて紀元二千六百年を祝したが、翌昭和十六年には日本が第二次世界大戦に突入することとなつた。そして戦況は次第に振わなくなり空襲がつづき遂に昭和二十年八月には、原爆が日本の敗戦にとどめを刺した。こうして日本はアメリカ軍の占領下に置かれることとなり、ようやく七年後の昭和二十七年これより解放された。

かかる時代を生きて来た私は、日本の国家主義の隆興と没落とを體驗したのみならず、更に国家と国家とが国家主義的に對立抗争する世界の矛盾を痛切に感ぜざるを得なかつた。この国家と国家との對立がもたらしたところの原爆的環境に於て主体的には依然国家の對立抗争がつづけられ全人類は今壊滅の危機に直面してゐるのである。かくて私の體驗したところのものは、国家主義のはかなさとその矛盾である。この私は、この国家の對立抗争を越え

て、真に総ての人々が人間として生き得る世界を將來することを以て、今日の世界的課題として把握せざるを得ないのである。

然らば今日までの経済学体系は、この世界史的課題を解決するに足るであらうか。資本主義経済学が利己主義的な主体の対立抗争する今日世界の形成を助長したものである以上これを解決し得ないことは当然であるとするも、果して今日の社会主義経済学がこれを解決するに適當なものであらうか。社会主義はロシア革命の「一国社会主義可能」によって事実愈々国家主義化されて来たが、スターリン独裁問題、ポーランド問題、ハンガリー問題等は社会主義の国家主義化を一層明かに実証しつつある。このことは、マルクス学の根柢としての論理の中に、その根柢が求められなければならないのである。所謂「平和的共存」と云うことも、「平和的共存」の世界を形成する新たな論理が明かにされているのではなく、これまで通りの資本主義国家と社会主義国家との存在をそのままにしておいて、それぞれの国の實力にまかせておくことによりそれぞれの国家の運命を決せしめんとする消極的な主張たるに過ぎない。かくて、今日の世界史的課題の解決の爲めには、新たに適切な理論が求められなければならないこととなるのである。

かくの如くこの新たな世界史的課題を解決すべきところの論理を求めることは容易でないのであるが、而もこの新たな理論は、事実この京都大学に於て用意されていたのである。このことは今なお多くの人々に自覺されていないと思われるが故に、京大を思い京大と共に生き貫いて来られた神戸先生の寿を御祝いするに当り、同じ京都大学の一員として今日まで育てられて来たものとして私は先ずこのことを明らかにする義務を感じるのである。この京大を本拠として私の研究生生活が進むにつれ課題並に論理に関する私の思想も次第に成生して行つたのであるから、先

ずこの学生生活の進展より述べて見よう。

### 三

本来原理的問題に興味を有していた私は、大学生活のはじめに当り、西田幾多郎先生を関田町の御宅にお訪ねして、哲学は如何にして学ぶべきかと云うことをお尋ねした。先生は、先ず優れた哲学書を精読し哲學的に考えられるようになることが大切であると云われ、カントの『プロレゴメナ』を読む様にと云われたが、当時はカントが最も重んぜられている時代であつた。それ以来、先生が終戦の昭和二十年の六月に亡くなられるまで三十二年に亘つて親しく教を受け一身上のことにまで御配慮を辱うした。その頃戸田海市先生の御宅にも上つて、経済学について同様のお尋ねをした。先生も経済学を学ぶと云うことは、先ず優れた経済書を精読して経済学的に考えられる様になることであると答えられた。この点西田先生と同様であつた。そして御自分の苦学時代にミルの原論を貸本屋から貸りて繰り返へし読まれた話をされ、更に経済学は先ず古典学派の研究より入るべきであると教えられた。この先生の教えに従つて経済学の研究をはじめた私は、先ずミルの原論を精読した。このミルの、経済学者以外何ものでもない経済学者は良い経済学者でない、という語は、その後永らく私の研究に影響を与へた。講師となつた時にも、このミルの原論とスミスの『国富論』を講読に用いて精読した。その外に先生の教えによりマーシャルの原論を精読していた。これによりマーシャルの偉大さを感じた私は、やがて留学のはじめ特にケンブリッジにマーシャル先生をお訪ねして先生御夫妻の優れた人格に接し御懇切な教を受けることとなつたのである。戸田先生よりは、常に有益な御指導を受けたが、ことに先生の広く深い独創的な考え方に教えられた。経済学の研究に哲学の研究が必要

であることも先生から特に注意された。留学の途につくに当り、須磨に静養して居られた先生をお訪ねした。先生は御病床に軀を起こされて「君が帰るまでは生きて居ないかも知れぬ、元氣に行つて来い」と云われたが、私の帰朝する前年に亡くなられた。独創的に広く深く考えられた先生は、西田先生とも親しい間であつたから、先生からこそ新しい経済学体系の創造を期待し得たのであつた。黒谷の塔の前にある先生の御墓に参り「享年五十四」と刻まれてあるのを見て、いつも残念に思うのである。この戸田先生が河上先生をも京都大学へ招かれたのである。私が河上先生の讐咳にはじめて接したのは、先生が帰朝されて翌大正四年一月講壇に立たれた時であつた。それ以来終戦の翌年先生が亡くなられるまで、西田先生と同様に、三十二年に亘つて親しく教えを受け、一身上のことにまで一方ならぬ御厚意を辱うした。私は大正六年大学を卒業すると大学院に進んだが、卒業式を終えて先生のお宅に伺つた時、先生は J. S. Mill の Autobiography 第一版の扉に以下の語を書いて下さつた。

是の書は余が予ねて君の卒業を祝せんとて倫敦に注文し置きしもの也 今卒業式正に終り君乃新たに誓を立てて大学院に入らんとするに臨み茲に所懐の一端を卷首に録して之を君に贈る

凡そ學に志す者は才の乏きを悲む勿れ努むることの足らざるを恐れよ所謂人一たびすれば己之を百たびすとはこれ也 昔はミル死の床に横わり最後の一句を吐いて曰う My work is done と斯く言い得て死するもの古来稀也 凡そ學に志す者は知られざるを恨む勿れ知らざるを憂えよ孔子の人知らずして慍らず亦君子ならずやと曰うもの即ち是也 昔はヘーゲル死の床に横わりて言えらく Nur einer hat mich verstanden ! 斯く言ふつつ彼は思はげに之に附け加えて言う Und der hat mich auch nicht verstanden ! 古来哲人は皆此の如し

今や世界の人類其數何十億我同胞凡そ六千万中に恒産を得ず恒心を得ざる者甚だ多し 君希くば所志を一貫して



天の負托に反く勿れ

この先生の御懇切な教えは、私の研究生活を貫いて指導針となった。そこには先づ懇切に學問に志すものの態度が、そして終りに經濟學研究の究極目的が適切に明示されている。それは世界の全人類をして、恒産を得て恒心を得しむることである。私の一切の研究は、このためになされなければならないのである。

大正十一年三月外國留學に出發し、東亜、西亜を経て西歐に至り英獨仏に滞在し、また欧州史上文化の栄えた地の殆んどをギリシヤ、スペインに至るまで訪ねることが出来た。そしてアメリカを経て滿三年後日本に歸つた。かくて世界史の進展を身を以て體驗し得た私には、世界史的な課題がこの世界史的な體驗を伴つて具体的に迫つて来た。そしてこの世界史的課題を解決するための新な經濟學を立てることが經濟學徒の使命として一層強く感ぜられ、先づその哲學的基礎を求むる念が更に強くなった。

私は留學前、田辺元先生の講義を聴き、御宅にも時々上つて教えを受けたが、留學に際しては同じ船で出發し、ベルリンで哲學書の購入につき御配慮を煩らわせ、やがてフライブルグで同じパンジョンに生活して、フッサール、ハイデッカーの講義を聴き、毎日夕食を共にし食後「城山」をあめ美しいゴシックの塔を眺めながら散歩した。この間、先生より多くを教えられた。カント派の「學の哲學」よりデイルタイ等の「生の哲學」への轉換の行われていることにも氣付かされて、デイルタイ研究をはじめに至つたが、帰朝後もこれをつづけてデイルタイ全集の新刊を追うて經濟學部の学生の講義にも用いた。田辺先生にはその後も永く教を受け一身上のことにも御配慮に預つた。丁度その頃は京都大学の哲學科の學問的生命の特に旺盛な時代であつた。西田先生が演習で、アリストテレスの『第一哲學』『デ・アニマ』を、またヘーゲルの『法の哲學』を読んで下さつたので、それから進んでアリスト

テレス、ヘーゲルを研究した。それまで新旧の古典派経済学の研究を主としていた私は、また河上先生によって、新にマルクスの哲学並びに経済学の研究を進めることとなった。マルクスの「経済学批判」の序に於て Philosophie und Geschichte の研究が彼の経済学研究の根底にあることを知ったことは、私の研究方針にも強い影響を与えた。

このマルクス研究はさき書いた様に、河上先生、三木清君等と共に作った『経済学批判会』に於て根本的批判的に進められた。そこには経済学部並に法学部の新進気鋭な人々が集り時に西田先生、田辺先生、木村素衛君等哲学科の方々にも来て頂いたことは、綜合大学の実を挙げることとなって、重要な出来事であつたと思う。これが機縁となつて哲学科の方々に於てもマルクス主義の研究が進められることとなり、かくて後に、ヘーゲルの觀念弁証法とマルクスの唯物弁証法とが止揚されて、西田哲学の実践的弁証法が確立することになり、これによりて西田先生の創造的世界の哲学が確立することとなつたと思ふ。そこに西田哲学と河上先生との間に交渉が見られる。こうして哲学者の側はマルクスを摂受して新たな発展を果けたのであるが、今度はこの新たな優れた哲学を摂取して経済学者、法学者等が新しい発展をとげるならば、『経済学批判会』にはじまつた法文経の綜合研究の意義は更に進むこととなるのである。

非才微力な私にとつては、新しい経済学の哲学的基礎を求める研究は、まことに困難なものであつて唯だ驚馬に鞭打つてこの道を進んだ。私のはじめての著書『精神科学的経済学の基礎問題』はこうした中であつて新しい経済学の基礎問題を経済学祖アリストテレスと経済学父スミスとの研究より明かにせんとしたものである。この間にあつて理解ある兄は、常に私を鼓舞してくれた。昭和十八年私が休職になつた時には、更に援助してくれた。この今は亡き兄は「二十年の素志をつらぬき新なる経済学をたてよおうと」と和歌をよんで励ましてくれた。この休職

の二年間は、終戦の翌年より二十七年に至る六年間の追放期間と共に、兄その他の人々の厚意により、研究に専心することが出来たのであって、今にして思えば、私の生涯に於て最も研究に恵まれた時代であった。休職期間には、私は京大に於ける日頃の講義の負担より解放されて西田先生に特に親しく接しながら只管西田哲学の研究に没頭することが出来た。また西田哲学を一層よく理解するために東洋文化の研究の必要を感じて大乘仏教（高等学校時代に母を失うた悲しみより池田栄吉先生に導かれて親鸞の『歎異抄』を耽読して真宗の教に接した）と五経（四書は中学校時代より親しんだ）の研究に進んだ。かくて自分で「超包の論理」と呼ぶものの考えに到達した。そしてこの論理の立場より新たな世界形成の経済学を立てることに努力した。この論理については、田辺元先生は書いたものを読んで是認して下さった、河上先生にも御話しして御賛同を得た。また西田先生にも申し上げたことがある。追放期間に入った時には、既に西田先生も、河上先生も亡くなって居られたが、私は依然この研究をつづけ、更に東洋史、世界史、日本史等世界史的研究にも努力した。

西田先生が「我が国に於てはいづれの学問に於ても尚深い根本的な理論的研究は微弱であると思う」と云われたことを、経済学について益々感ずるに至った私は、追放解除後も今日に至るまで尚おこの道を進みつつあるのであるが、ようやく新しい経済学を「創造的世界経済学」として考え、その基礎問題も幾分明にし得たので、ここには先ず私が到達した「超包の論理」なるものの成立とその輪廓とを述べ、然る後に京都大学に於て新しい経済学の基礎が如何に準備されたかを述べることとする。

本来西欧の論理は、自、我、的、主、体、の、論、理、であつた。これを経済学について見るも、スミスの経済学は、利己的な個人的主体が自己本位に経済的実在を形成する個人主義の経済学であつた。リストの経済学は、国家が自国本位に経済的実在を形成する国家主義の経済学であつて、ヒットラーの全体主義経済学はその徹底せるものであつた。マルクスの経済学は、彼が「人類歴史は階級闘争の歴史である」と云うところのこれまでの利己的な階級的主体が自己本位に対立抗争することによつて形成し來つた社会を階級なき「人間的社會」に形成發展せしめんとするのであるが、而もこのことを無産者階級の階級闘争によつて為さんとするとところの階級主義の経済学である。かくて西欧に成立した経済学は何れも利己的主体を形成原理とするところの経済学であると云うことが出来るのである。この西欧文化に於ては絶対すらも主体的に考えられた。ヘーゲルの『世界史の哲学』に於ても、旧約聖書以來の自己本位の神が絶対者として立てられて居る。かかる神は人間と対立するところの主体的なものなるが故に、それは相対なものであつて真に絶対と云うことは出来ない。真の絶対なるものは一切の主体を超えてこれを包んで生かすところのものでなくてはならない。かかる絶対は、東洋文化ことに大乘仏教に於て把握されたところのものである。大乘は無神論であると云われるのは、人格的な神を絶対と考えるのではないからである。昨年来日した世界的歴史家トインビー氏は、京大に於ける西洋史の研究会で（小生も出席した）キリスト教は排他的であるが故に、將來の世界宗教とはなり得ない、真に世界宗教たり得るものは大乘であると云う意味を述べ大乘の考えを求めたが、それは有の神を絶対とするキリスト教の限界をよく自覚せるものと云わなければならない。然し西洋文化の特長はその主体がどこまでも実践的であるが故に、自然的実在を形成する自然科学と共に社会的実在を形成するところの経済学その他の実践学を創造したことがある。これらの科学によつて世界の自然的実在にまた社会的実在に未曾有の形成發展を

齟りしかくて近世に於て西洋論理が全世界を支配することとなったのである。而もその実践主体が利己主義であったが故に、それによつて形成された今日の世界に於ては、諸の利己的主体が対立抗争し、かくてこの世界は行き詰まらざるを得なくなつた。故にこの世界は西洋の主体的論理をもつてしてはこれを人間的な世界へと変革することは出来ないのである。かくて今や利己的主体の論理自体が転換しなければならぬこととなつたのであつて、ここに西洋論理そのものが限界に到達したのである。このことはこの西洋論理に立脚せる西洋の経済学が限界に到達したことである。

然らばこの利己的主体の対立抗争する世界を真に人間的世界に変革せんとする今日の世界史的課題は、東洋論理によつて解決し得るであらうか。東洋文化は眞の絶対の自覚に到達した。然しこの絶対を自覚してそこに安住していたが故にそこに停頓してこの世界を形成發展せしめることが出来なかつたのである。かくて新しい世界を形成する論理は、この西洋的論理と東洋的論理とを真に止揚した最も具体的なものではないのである。

すべて対立抗争するものは個人も階級も国家も共同の場に於て共にあるのである。共同の場にはないものは対立抗争することが出来ない。かくて対立抗争するものは共同の場に於て共に生かされているものである。然るにこの事実を自覚せず自己を共同の場より抽出して自己本位に考え自己本位に行動するが故に、対立抗争することとなるのである。これが今日の自我的主体の対立抗争の世界である。この主体が自我的な考えで超えるとき、自己の根柢に自他總ての主体を包んで生かしているところの共同の場としての世界を自覚するに至るのである。

これ觀念の迷を破つて事實に至るのである。かくて一切の自己本位の主体は、自我を越えて一切を含んで生かすところの共同の場としての世界の働きとなつて働くこととなるのである。ここに、自我的な主体自体が転換するこ

となる。それは總て主体が自我を超えて一切を包んで生かす働きとなるのであるが故に、これを「超包の論理」と云うことが出来るであらう。この「超包の論理」が、新しい世界形成の論理である。かかる世界に於てはそれぞれの実践的主体は、自我を超えて一切を包んで生かすところの創造的世界の働きとなって働くのであるが故に、そこに各々が個性存分に働きながら而も仕事に於て一つになり全体が調和するのである。

この「超包の論理」の構造は、創造的世界の構造に基いて更に明確にさるべきであるが、ここにはこれに到達するに至れる過程より、その輪廓を述べたに過ぎないのである。

## 五

以上に於ては、私の到達し得たところの今日の経済学の論理について略述したのであるが、ここにはかかる論理が京都大学の中に如何に生れつつあつたかを見ようと思う。既に述べた如く今日の世界史的課題は、これまで利己主義的主体によつて形成され来つたところの今日の世界を真に人間的な世界へと形成發展せしむることであるが故に、この新たな人間的な世界を作るところの論理は、これまでの利己的な社会を形成したところのものと異ならざるを得ないのである。然るにマルクスに於ても「人間的社會又は社會的人類の立場」より「世界を變革する」と云ふ語が用いられているが、この「人間的社會」を形成するところの論理が積極的には明確にされていないのである。これまで河上先生は多く伝統的なマルキストとして考えられていたのであるが、この問題に關する先生の貢獻に注意しこれを理解し尊重しなければならぬと思ふのである。

先生は『自叙伝』第五卷の「大死一番」なる題目の下に、次の如くに述べておられる。「私の精神に、私の一生

に、決定的な影響を与えたものが二つある。その一つは宗教で、今一つは科学である。いづれも、之ときまったお師匠はなく、まるで盲人が物を手操りするようにして、まごつき廻った結果、漸くにして探り当てたものだが、一旦探り当てた後は、たとい他人から何と言われようと、自分の身がどうなろうと、嘗て手離すことなしに、六十四歳の今日まで生き延びて来た私である。「私は、マルクス主義を奉じながら、宗教的真理なるものの存在を信じているのであって、その点に、私という特殊性がある。」「畢竟私が、宗教的真理の存在を承認する一個のマルクス主義者として自己を規定することが出来るのは、謂うところの宗教的真理の存在に対して特殊の見解を抱いているからに外ならない。」然らばこの宗教的立場とは如何なるものであるか。先生は、ここにこの宗教的真理をその青年期に於て如何にして把握するに至ったかを述べて居られるが、このことによつてこの宗教なるものの性格が明かにされるのである。

「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ……」私には之が絶対的、非利己主義の至上命令と感じられた。私の良心はそれに向つて無条件に頭を下げた。そうした絶対的、非利己的態度こそが、洵に人間の行動の理想でなければならぬと思われた。そして自分の心の奥には文字通りその理想に従つて自分の行動を律しゆくようにという、強い要求のあることが感じられた。だが、それと同時に、私の心の中ではまた、「そんな態度では、お前はとても此の世に生きて行くことが出来ない。お前はすぐにも身を亡ぼすであらう。」という危惧の念が動いた。かくして私の心には、初めて人生に対する疑惑が……植えつけられた。私の心の煩悶はそこから始まる。」ここに「絶対的非利己主義」の理想と利己主義的な現実との対立に悩む青年河上が見られるのである。この論の終りの方に、この危惧の解決が次のように示されている。「以前私

が危惧したのは、私がこの五尺の身体を我と思つたからである。しかし此のからだは我なのではない。元來このからだを自分の私有物と思うのが間違ひで、之は暫く預つてゐる天下の公器である、と云うことを悟るならば、このからだを大切に育て上げ、他日必要と認めた場合に之を天下のために献げると云うことこそ、自分の任務でなければならぬ、と云うことが会得される。かくて私は、絶対的非利己主義を奉じながら、心中臺末の疚しさを感ずることなしに、このからだに飲食衣服を供し、睡眠休養を許し、なお學問をもさぞ知識をも累積させて行くことが出来るようになった。ただ問題は、絶えず私心の掃滅に努め、この五尺の體軀をして真に天下の公器たるに値いせしめることに存する。問題は新たに、かく私に課せられた。私は初めて迷ふことなく、爾來四十年になんなんとする生涯を渡り、幾たびか狂瀾怒濤を踏んで、未だ身を殞するに至らず……」と云うて居られるが、ここに先生の一生を通して變らざる先生の本質が見られるのである。即ち先生は一生御身分を「天下の公器」として「絶対非利己主義」の立場に立つてこれを天下のために役立てることを生涯の使命とされ、このための理念を求める求道者の態度をもつて経済学的研究に向われたのである。かくて古典学派経済学の研究より人道主義派経済学に進まれ、更にマルクス研究に進まれた。私の大学生の時代は先生は人道主義派を重んずる段階にあつたので、カール・マルクス、ミル等を熱心に講義なされた。この時代の先生の思想が結晶したものが『貧乏物語』であつて、それは私が大学を卒業した大正六年のはじめに公にされたが、これは一九一四年であり正にロシア革命の年であつた。この著に満足し得なくなつた先生は、更にマルクス研究に進まれることになつたのである。かくて先生のマルクス研究は、「天下の公器」としての「絶対的非利己主義」の立場に立つたものである。ここに先生は御自分の特色を自覺しておられたのである。そして先生はこのマルクス主義の研究とその実践とに地位も、名誉も、財産も、健康をも一切を捧



げ尽されたのである。かく自己の真理と信ずるところに一切を捧げ尽された先生に於て我々は古今東西の学者にも稀な真剣な生涯を見るのである。然らば先生をかくも偉大ならしめたところのこの立場の本質は何であるか。

先生は「西洋的なもの」としてはマルクス主義、東洋的なものとしては……宗教的真理、この一つについては……次第に確心を固めるのみで嘗て渝ることなく、今將に一生を終らんとしている」と述べ、また曰く「私は元來蒲柳の質で、「寝ねず、休まず」などという生活を続けようものなら、間もなく殞れるに決まっていた。しかも私は断乎としてそうした生活に突き入ろうと決意した。私は死を考えたのではない、死を決したのだ、死に直面したのだ。それは禪家に謂う所の大死一番なるものに相当する。私は小我を滅却することによって物心の対立を超越し、心を心で見る事が出来たのだ。その瞬間こそ即ち私が謂うところの宗教的真理を把握した瞬間なのである。」かくて「天下の公器」と云う先生の自覚は、東洋的宗教ことに禪の覺りに相当するものあることを知るのである。この『自叙伝』を読んで思い合せることは、先生が私共二、三人を伴つて天龍寺に間宮英宗師を訪れ、今北洪川の『禪海一瀾』の講読を所望されたことである。それは先生が御自身の体験より経済学者たらんとするものもその根底に於て禪的な自覚がなければならぬと考えられた為めであることを思い、今更に先生の一方ならぬ御親切に感謝するのである。かくて先生は東洋的な大乘的な悟りに到達されたのであり、この大乘的悟りを根柢となすことによってマルクス研究に全力を挙げて精進し遂に一切をこの実践の為に挙げ尽されたのである。このことの世界経済学史上に於ける意義の重大さを我々は十分に意識しなければならぬのである。私は先生が亡くなられて『自叙伝』に接して「天下の公器」の意義を自分の「超包の論理」の立場からはじめて気付いたのである。

かく河上肇先生に於ては東洋的大乗の悟りの上にマルクス主義が立てられんとしたのであるが、この態度を學問

的に徹底し確立せんが爲めには進んでこの大乘の悟り又は絶対的非利己主義の立場とマルクス主義の立場とが内面的に論理的に統一され一つの新しい具体的な論理として確立されなければならない。このことは、前述せし如く、これまでなされ得なかった。然るにこの世界的な偉業が、わが西田幾太郎先生によって、はじめてなされたのである。西田先生は、次の如くに述べられている。<sup>6)</sup>「東洋文化の根柢には西洋文化に勝るとも劣らざる貴いものがあるのであるが、弱点はその学として發展しなかつたことにあると思うのである。今日西洋文化におされがちなのはこれによるのである。」「欧州人には従来自分等の文化が唯一つの最も進んだ最高文化だと考える傾向がある。併し私はそれは狭量な自負であると考える。歴史的文化的の原型はもつと豊富でなければならぬ。我々は深く西洋文化の根柢に入り十分之を把握すると共に、更に深く東洋文化の根柢に入り、その奥底に西洋文化と異なつた方向を把握することによって、人類文化そのものの広く深い本質を明かにすることが出来るのではないかと思うのである。

それは西洋によって東洋文化を否定することでもなく、東洋文化によって西洋文化を否定することでもない。又その何れか一の中に他を含み込むことでもない。却つて従来よりは一層深い大きな根柢を見出すことによって、両者共に新しい光に照らされることである」「歴史的世界の原型を考えるとすれば、それに於て種々なる方向に重心を有つた種々なる文化が考えられ、相補足することによつて世界文化を構成すると云うことが出来る。」「東洋文化の立場から世界文化に新らしき光を与え、世界文化に貢獻すると云うのは、右の如き意味に於てなければならぬと云うのである」これにつづいて西田先生は、「我が国に於ては、いづれの學問に於ても尚深い根本的な理論研究は微弱であると思う。」と云うて居られるが、前述せし如く、経済學界に於ても、これまでは西洋に於て成立せる経済學の体系を至上なものと考へその原理をそのままに受け入れてこれを祖述することが経済學者の主たる仕事とな

つていたのであつて、この原理そのものを創造的に發展せしむるが如き努力は殆んどなされなかつたのである。然るに河上肇先生に至つてはじめて、マルクス主義の立場そのものについて原理的發展的な方向が示めされることとなつたのであるが、西田哲学に至つては更にこれが世界的論理として深く哲学され得るに至つたのである。即ち西田哲学に於て深く東西文化の形成力が論理的に明確にされ更にこれを止揚することによつて世界的文化の形成力としての世界的論理がはじめて明かにされたのである。先生が「歴史的世界の原型」と云われるのは即ちこれである。東西文化の相異つた形成力は、この「歴史的の原型」の異なつた方向に重心を有つたものでありそれらは互に相補足することによつて具体的な世界文化を形成すべきものと考えられた。西欧文化が即ち人類文化であるとする考えを非とされる先生は、これと反対に東洋文化こそが眞の文化であるとする考えも單なる反動であるとされる。かくて次の如くに云うて居られる。「違ふと云ふことは弱点である。」「此両方向のものが結びついたところに大きな世界文化が考えられる。将来文化はそういうところにあるであらう。」「その方向に進み、そこで結びつくといふことではなくてはならない。」

かかる考え方によつて西田哲学に於ては東西文化の形成力は止揚され世界的形成力としての最も具体的な論理が確立された。ここに西田哲学の世界史的意義がある。更にこの創造的世界の論理の立場に立つて、今日の利己主義的国家主義としての帝國主義的世界を具体的な世界としての「世界的世界」へ変革することが今日の世界史課題として把握され、これを解決する「世界的世界形成主義」なるものが明かにされ、更に「抽象的な經濟人としての立場からでなく、具体的な「國富論」としての經濟學もかかる場から考え直さるべきであらう」と云われている。

西田哲学は強い世界的な實踐的性格を有するものであるが、それがここによく現われている。今日多くの人々は、

西田哲学を真剣に研究することもせず、傍観的な態度を以て、それを観念論的なものときめているが、今日の世界史的課題と実践的に取り組みこれを解決する立場を根本的に求める者は、これを西田哲学に学ばねばならないのである。かくて西田哲学に於ては、今日の世界史的課題を解決すべき新しい世界経済学の哲学的基礎が、全般的に与えられているのである。今日の経済学を「創造的世界経済学」として建てんとする私は、これを確立すべき哲学的基礎を西田先生の創造的世界の哲学に学ばなければならなかった。私の「超包の論理」もこの創造的世界の哲学に於て学問的に展開し得るのである。

以上に於てはこの経済学の課題とこれを解決すべき論理とを序説的にその成生の過程に於て見たのであるが、稿を改め進んで理論的にその哲学的基礎より明かにしたいと思うのである。

(昭和三十二年八月二十五日)

(1) 拙著『精神科学的経済の基礎問題』第三六頁に経済学体系の「生的基礎」の意義を述べ、本論の研究に於てこのことをなした。

(2) 経済論叢第七十九卷第三号拙稿『谷口吉彦兄と当時の経済学部』参照。

(3) マルクス、『フオイエルバッハのテーゼ』第十及び第十一。

(4) 河上肇著『自叙伝』(岩波版)五第一一〇頁以下。筆者点を附す。

(5) 西田幾多郎先生もこの書を青年の読むべき書として山本良吉先生の編集された『静修書目問答』に挙げて居られる。

(6) 『学問的方法』西田幾多郎全集別巻Ⅵ第一四三頁参照。筆者点を附す。

(7) 『現実の世界の論理的構造』西田幾多郎全集。別巻Ⅱ第二六〇—二六一頁参照。

(8) 『哲学論文集第四補遺』西田幾多郎全集別巻Ⅵ補遺第九頁以下参照。